



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Relationship between neuroticism and oral health-related quality of life in patients with removable partial dentures [an abstract of entire text]
Author(s)	石田, 桂大
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(歯学)
Dissertation Number	甲第12588号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65358
Type	doctoral thesis
File Information	Keita_Ishida_summary.pdf



学位論文内容の要約

学位論文題目

Relationship between neuroticism and
oral health-related quality of life in patients with
removable partial dentures
(可撤性部分床義歯装着患者における神経症傾向と
口腔関連 QOL の関連)

博士の専攻分野名称 博士（歯学） 氏名 石田 桂大

【目的】可撤式部分床義歯（RPD）装着予定患者における神経症傾向と補綴治療前・治療後の口腔関連 QOL（OHRQoL）との関連、および神経症傾向が OHRQoL の変化量（治療効果）にどのような影響を与えるかを明らかにするために、前向きコホート研究を行った。

【方法】2015 年 7 月から 2016 年 7 月までに、北海道大学病院歯科診療センター義歯補綴科にて最終補綴として RPD を作成予定の患者を対象とした。患者の神経症傾向は RPD 装着前に日本版 NEO-five-factor inventory（NEO-FFI）によって評価し、補綴治療前と治療後の OHRQoL は日本版 Oral Health Impact Profile（OHIP-J）を用いて評価した。また、患者基本情報として年齢、性別、Eichner 分類を調査し、補綴治療前と治療後にデンタルプレスケールを用いて咬合力の測定を行った。神経症傾向と治療前・治療後の OHRQoL との相関を Spearman の順位相関係数により検討し、OHRQoL の変化と神経症傾向の関連については、Wilcoxon の符号付順位検定を行い検討した。さらに、ロジスティック回帰分析を行い、治療効果に影響を及ぼす因子を検討した。なお、本研究は北海道大学病院自主臨床研究審査委員会の承認を得て行った（自 014-0434）。

【結果と考察】神経症傾向が高い患者ほど補綴治療前の OHRQoL は低く、両者に相関を認めたが、治療後の OHRQoL と神経症傾向には相関が認められなかった。多変量解析においても神経症傾向の高い患者ほど有意に大きな治療効果が得られることが示された。神経症傾向が高い人の特徴として、他人よりストレスへの対処が苦手であることが挙げられ、口腔内に種々の問題があるとそのストレスに対処できないために治療前の OHRQoL が低くなったものと推察された。しかし、補綴治療後には口腔内の問題が解決されてストレスが解消されたため、他の患者と同様の OHRQoL を得られたのではないかと考えられた。

【結論】神経症傾向が高い患者ほど RPD による補綴治療前の OHRQoL は低い、補綴治療によって OHRQoL は大きく改善し、治療後の OHRQoL は神経症傾向の影響を受けないことが示唆された。